

中国陝西省韓城地区の集落及び住宅に関する研究（1）

青木 正夫

1. はじめに

居住地を敵や獣から守るために壁で取り囲むことは、紀元前から行われていた。その後もイタリアの中世都市、インドのムガル帝国の諸都市等、堅固な城郭で囲繞した都市については、よく知られている。中国では都市だけでなく北部の農村集落も、清時代ではほとんど土塼で囲まれていたといわれている。

しかし、陝西省・山西省の農村集落に見られる、逃げ込む場所としての寨を築いているのは、この地方のみではなからうか。その中でも、ほとんどの集落が堅固な逃げるための寨を設けているのは、韓城地区だけである。たとえ、村の住宅は荒らされ焼かれても、一族が生き延びることだけを考えた、「生」への執念の産物が寨である。都市の城郭や寨の存在については多くの文献があるが、このような逃げるための寨については、既往の文献には全く述べられていない。

また、この地方の住宅は、形態は四合院であるが独特の地方性を持っている。「一明両暗」が基本単位ではなく、大庁は1室構成で、廂房は偶数の柱間で基本単位は2間1室構成である。このタイプが分布する陝西省・山西省・河南省の一部の単なる地方性か、「一明両暗」より前の原型かを究明することは容易ではないが、実態を詳細にとらえておくことが必要である。

2. 寨が造られる理由・背景

韓城地区に堅固な逃げるための寨が多く造られた理由としては次のことが考えられる。

- (1) 地理的位置が重要な通過路に当たり、古来争奪の地であったため戦場となることが多かった。
- (2) 土匪が横行し、富裕層が財産を守る必要があった。そして次の背景から逃げ込む場として寨を造るようになったと考えられる。
- (3) 地形上、最適な場所があった。
- (4) 守り・戦うのに容易であった。
- (5) 築造費が経済的であった。

2.1 地理的位置

この韓城地区は西安から東北230kmに位置し、関中平野の最北端で、関中と北方を結ぶ通過路として最適の場所

であった(図2-1)。古来黄河を渡ることは容易ではなかったが、この地区が渡るのに最も容易な場所であった。地区の北端に禹が穿ったといわれる幅300mの龍門があり、そこから下流は一気に2km近くの河幅となっている。河幅の広い所はその日その日で土砂の堆積場所が異なり渡るのが容易ではないが、河幅の狭い龍門以北は流れは急であるが、それでも危険度が少なかった。河幅が狭いだけでなく、冬期の「大雪(12月26日頃)」から「啓蟄(3月6日頃)」の2か月間凍って「氷橋」が出来、人馬が歩いて渡ることも可能であった。また西北側の重畳たる山岳地帯は、土匪の格好の拠点となり、また回族の拠点であった現在の寧夏回族自治区に通ずるルートであった。従って、古来戦略上重要な地区で争奪の地であり、度々戦場となっている(表2-1)。



図2-1 韓城の位置

表2-1 韓城地区における主な戦史

年 代	内 容
周 襄王7年(紀元前645年)	秦がこの地で晉を破る
戦 国	秦と魏との争奪の場、秦が東方へ勢力を伸ばすにはこの地をおさえて黄河の渡河点を確保する必要があった
西 漢	韓信がこの地を通過して魏を襲う
東 漢	登禹が軍を率いて渡河
1128年2月19日	金兵、龍門から渡河 宋の將兵戦わずして逃亡
1229年12月	元兵、龍門から渡河 韓城を撃破
1230年	元兵、韓城に來襲、蹂躪、略奪
1629・32・33・34年、35年12月	農民蜂起軍が攻撃
1636年12月	李自成が政府の軍隊と戦う
1644年	李自成、敗れた軍隊を率い龍門から渡河、韓城に1か月駐留
1650年	劉永祥が「反清復明」の旗を立て拳兵、清の大軍と激戦
1867～69年	回族の蜂起軍が数回にわたって來襲、略奪
1914年	軍閥の兵士が各地に出没して略奪
1915年	西北部の山岳地帯の土匪が出没
1917～18年	軍閥の横行
1925年	段憲功が県城を攻め、城外で略奪

以上のほかに、記録に残らない戦いや略奪は数多くあったと思われる。「水滸伝」の最初に出てくる小華山の山寨はこの近くである。歴史の中で、常に、農民が自らを守る手段を講ずるのは当然であった。

2.2 各集落とも富裕な層がいた

かつての中国では、一族の中で立身出世した者が出ると、その恩恵にあずかり一族が潤うことが多かった。寒冷地で農業生産性の低い韓城地区に、富裕な層が多かったのはこのためである。韓城地区は古い歴史を持ち、文化的レベルの高い地域で、多くの優れた人材が輩出している。春秋時代の管の義士程嬰は、この地の人として伝えられ、墓は保安村にある。秦末、項羽の臣董翳も韓城が出身地である。最も有名なのは、漢代の大歴史家司馬遷である。生まれてから、父が見いだされて太史令となり、長安に出て行くのに伴われた6歳まで、この地で過ごしたと推測されている。墓は韓城の南15kmの所にある。唐時代の白居易もこの地区の出身といわれ、墓がある。

その後、明・清時代に進士119人、挙人550人、貢士727人、科挙で首席を取った者が清朝だけで14人もいる。官階としては五品以上に達した者が130人余りおり、宰相2人、尚書5人、侍郎10人、巡撫6人、参政5人、布政使7人、通政使12人、都督・將軍・副將・參將5人、郡司9人と、文官・武官ともに数多い。明朝以来「朝半陝、陝半韓」(朝廷の高官の半分は陝西省出身、その中の半分は韓城出身)といわれ、際立って高級官僚の輩出した地域である。

また、党家村のように、同族で河南省に南北の物資の交易会社を設立し、各家は株を持ってその利益で全体が潤った村もある。特に明・清時代に優れた人材を多く育てたのは、教育熱心な土地柄に加えて私塾の存在があった。党家村でみると、99戸ばかりの集落に清時代13か所の私塾があった。

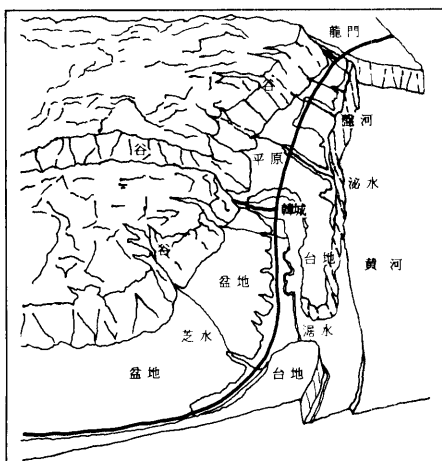


図2-2 韓城周辺の地形略図

2.3 地形上最適な場所があった

この地域は黄土地帯で、黄河の氾濫と西部山岳地帯からの流水によって、いたる所が浸食され複雑な地形となっている(図2-2)。高低差20~50mの断崖絶壁で接している所が随所にあり、3方向絶壁で島のように突き出た所が絶好の寨の適地であった(写真2-1)。また、南澗村や党家村のように、集落に隣接して寨の適地がある場合もある。多くは明初以前にこの地に移り住んだ集落である。まず、靠山式の窑洞を造って住み、その後その近くの平らな土地に集落を形成していった。寨が必要になると、かつて窑洞を造っていた高台に寨を設けている(図2-3)。

2.4 守り・戦うのに容易であった

村の街路は自然発生的に出来たものが多く、迷路的で狭く、敵に対応するのに迅速に行動することが容易でない。特に大砲など兵器の移動には困難が伴う。寨は戦うことを考慮して内部の街路も計画的に造ることが可能で

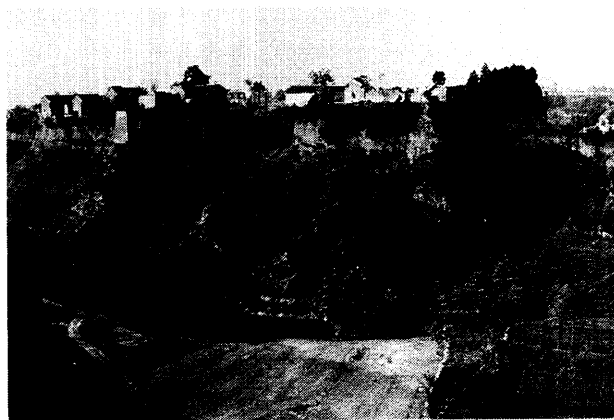


写真2-1 解老寨(調査済み寨No.19)

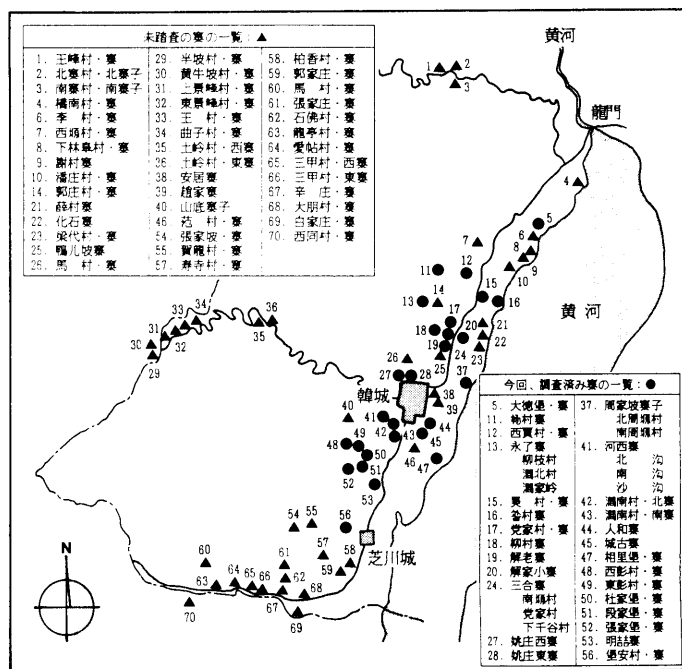


図2-3 寨の分布

あった。また、先に述べたように、谷からは容易に侵入できないため、1方向あるいは2方向のみに重点をおいて守ることが可能であった。

2.5 築造費が経済的であった

村をすべて城壁で囲むことは経済的に容易ではなかった。規模が大きくなればなる程その出費は大きかった。寨は逃げる場所故、村の面積の1/3~1/5のものが多く、経済的であった。特に3方が谷の場合一方のみを重点的に高くして防御し、他は後に述べるように、チリトリ型に低くする方法も採ることができて、土量を少なくすることが可能であった。築造にあたっては、当時機械力が無かったため、一様に、土を運ぶのが大変であったといわれている。

3. 村の生成・発展

寨を論ずる前に村の生成・発展について概説しておく。表3-1は「韓城市史」に掲載されている、村の発生年代を集計したものである。ただ、これには多分に誤りがあることが判明している。最も多いのは、既存の同族村に他の姓の家族が住みつき、次第に勢力を拡大し、かつての一族を他に移住せしめた例である。この場合その村の発生年代は後の家族が村へ入り込んだ時を挙げている。段家堡のように、かつては劉家堡と呼んでいたが、劉家一族を追い出し、段家一族だけになったため改名した村もある。この場合改名した時を村の発生年代としている。しかし、元の発生年代が不明のため、「韓城市史」の年代をそのまま採用した。

周の時代から村落（咎村など）のあったことが知られている。外から移ってきて定住者が増加したのは漢以降といわれ、山西からの移住者が多い。「韓城県郷土志」によれば「西魏の時に、薛龍駒氏が汾陽（山西）から移住し、代々住み続けて、その一族は約20個の村となった」「高氏は延長県出身、宋時代に移住してきて、現在25代目、その一族は約30村に達した」「吉氏は元の時代合陽百良鎮から」「王氏は明時代山西洪洞県から」等とある。

表3-1 村の発生時期

時代	周	春秋	秦	漢	隋	唐	宋	金	元	明	清	民国	解放後	不明	合計
村数	3	2	1	12	2	10	36	12	31	168	472	68	28	35	880

村の数として元代は206個、平均1km²に0.13個、明代は362個、平均0.22個、清嘉慶22年（1817年）には793個、平均0.48個、民国26年（1937年）は860個、平均0.53個であり、平原地帯では明・清時代245個、平均0.6個である。飛躍的に増加したのは明の時代である。その大部分は黄河に沿って平原地帯に立村し、その後大きな集落となっている。数としては清の時代の立村が多いが、そのほとんどが山岳地帯の小規模村である（図3-1）。

4. 寨の築造時期

戦略上重要な地域であり、また戦いも多かったことから、古くから防御策が種々講じられていた。最も古いのは、中原の秦からの侵入を防ぐために設けられた魏の長城である。戦国時代魏王19年（紀元前352年）にこの地区の南部に20kmにわたって設けられたもので、現存している一番古い城壁は、高さ10mで長さは430mである。「烽火台」の一部も残っており、国の重点文物保护单位に指定されている。軍隊の砦としては山岳地帯の薛峰村に隋時代の城壁が残っている。後に村の寨として再利用されたため、詳細は不明である。

韓城市の城壁は、金の大定4年（1164年）から周長約2.1km、高さ約8m、濠の深さ約6.4mの大きさで土で造られ始め、その後、明の崇禎13年（1640年）に朝廷の同意を得て、周長約3.1km、高さ約9.6mの煉瓦積城壁に造り直されている。

また、韓城市から10km南の軍事的最大拠点であった芝川鎮には、明の嘉靖22年（1543年）に周長約2.5km、高さ約9.6mの城壁が築かれている。



図3-1 清時代の村と寨（党家村の場合）

表3-2 <参考>中国の歴史年表（中日大辞典、大修館書店1989.11.版から作成）



注目されるのは、堡の存在である。堡の名のついた村をプロットしたのが図4-1であるが、韓城市を守るように南及び黄河沿いに位置している。文献には、この堡に関する記事は全く無く、11名の歴史家・郷土史家に尋ねると、異口同音に堡は平地に壁を造ったもので、寨は特殊な地形を利用して造ったものと述べている。しかし、堡のついた村はいずれも古い集落で、杜家堡の碑文によれば、城壁を造る前から堡と称している。金以降に北方から侵入を受ける以前の、南からの侵入が主であった時代に防御用につくられた集落ではないだろうか^{注1)}。

この地区の逃げるための寨の最も古いものは、現調査時点では解老寨(1621年)と郭庄寨(……年)の2つである。当時、寨を造る条件は非常に厳しく、勝手に造ることは許されなかった。朝廷は寨を拠点として反乱するのを非常に恐れていたからである。従って、大官・大吏など政府の役人の出身地で信用のおける村しか許されなかった。解老寨は“一母三進士”“二人巡抚”等の出身地であったことから許された。郭庄寨は解家の人頼り、そのとりなしで許されたといわれている。

その後、明末の崇禎時代(1628~1643年)に寨造りのブームが起こるが、先にみたように、農民蜂起軍がしばしばこの地を襲ったことから、富裕階層は寨を造る許可を要求し、政府も制限を緩めたためである。他の一つのブームは清の道光30年(1850年)太平天国の乱が起こるころから、更に同治6年(1867年)の回族侵攻を契機として、清政府は官吏の出身地の如何を問わず、制限を緩め築造を奨励したためである。回族は襲う前に必ず2、3人で偵察にきたことから、寨を持たないと襲われるた

め各村は争って寨を造った。解放後、機能を失ったことから次々と壊され、現在幾つ残っているのか、韓城市政府も実態を全くとらえていない。正確には不明であるが約七十数個といわれ、その中でも住んでいる寨は更に少ない。解老寨のように、解放前には51戸あったが、現在1戸だけという寨もある。

5. 寨の設置個数

多くの場合、1つの村に1つの寨が造られる(以下、単一寨)。しかし、2つあるいは3つの寨を保有すること(以下、複数寨)もある。集落の規模が大きく、1つの寨では村民全員を収容しきれない場合、同じ村民ながら姓が異なるので寨も別々に造る場合、更に地形条件の関係で本村からかなり遠方に造った寨が不便なため、あえてもう1つの寨を近接地に造り複数化した場合などである(表5-1)。

逆に、幾つかの村で1つの寨を共用する(以下、共同寨)ものもある。集落規模が各々小さくて、単独では寨を築造する費用が捻出できない場合、現在は別々の村ながら祖先が一緒、姓も墓も一緒に、寨も共同で造る場合、個別に持つことを行政府から制限されていた場合、あるいは、もとは1つの村であったものが、地形の変化により分割され、結果的に寨を共用する形になったケースなどである。これら共同寨に属する村の中には、やがて裕福になって、あるいは支配者の許可を得て単独で寨を持つようになった事例もある。現在、民家の保存地区に指定されている党家村の寨はその典型である。また、共同寨があまりに遠くて不便なため、地主層が本村内の一族郎党の居住区画のみを、あたかも寨のように防御し、望楼を設けた事例も見られる。

このほか、寨を持たず、村自体に城壁を築き自衛を図ったもの(以下、城壁村)もある。

6. 築造費用・期間

党家村の石碑によれば、その寨(1856年)は、地主33戸が40文ずつ合計1,320文を拠出して築造したと記されている。この費用は、城古寨の関帝廟の享殿の改築にあたり、嘉慶21年(1816年)から道光2年(1822年)にかけて、2,139文の拠金を集めているのと比較して、非常に少なく寨壁のみの築造費と考えられる。寨内の住宅はもちろん、道路の石敷き、池、廟などは別立てであろう。材料の土や村人たちの労賃は無償であったので、版築工法の本の仮枠代と技術者2人の賃金、土地購入費などであろう。寨築造後の住宅・道路など、寨内の整備の方が多額の費用を要したと考えられる。工事期間は規模によって異なるが、短いもので1年半、長いもので3年^{注2)}、おおむね2年を要している。

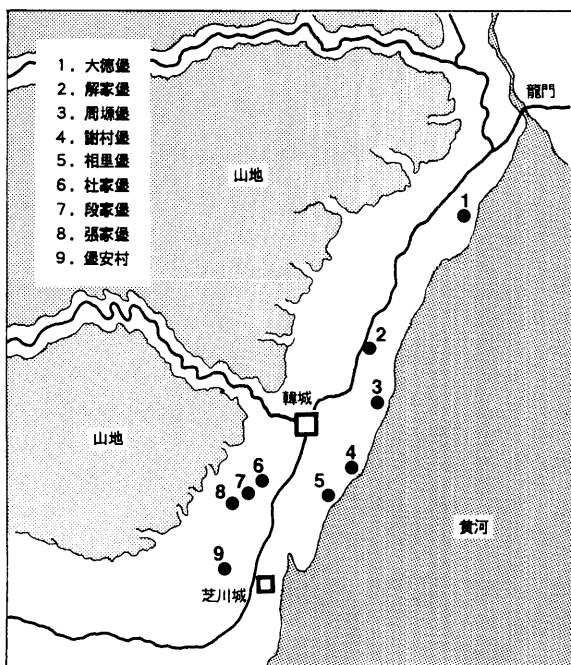


図4-1 堡のつく名称を持つ村の分布

7. 調査概要

1987年の韓城地区党家村調査の折に、周辺集落にも寨のあることを見だし、1989年に数か所の寨の調査を行った。この度は、調査対象である31村25寨（村と寨の数が一致しないのは共同寨、複数寨があるため）について、1993年8月に予備調査を、10月26日から11月3日にかけて本格的な実測及びヒアリング調査を、日本側5名中国側6名で行った。調査前には、必ず中国側が現地で諸準備を整えていたので、調査は順調に行うことができた。

集落・住宅とも典型事例を選定し、調査を行った。ただ、寨は現在、機能的には無用の長物化したため、破壊が進行中であり、解放前の実態をとらえることは容易ではなかった。寨及び関帝廟の工事に関する碑文が、最も信頼できる資料であるが、文革中に1000個以上の碑が悉く壊され、一説によると、韓城市の毛沢東の像の礎石として50個ばかりの碑が使われたとのことである。村に残っていた碑も2つに割られ、別々の家の敷地内で腰掛に使用されている有様であった。また、たまたま新築中の現場で1 m下の土の中から石碑が見つかり、それを引き上げているところに、通りがかかるという幸運に巡り合ったこともあった。また、家系図も文革の時、悉く破壊されて全く残っていなかった。

事細かに探るには、古老からのヒアリングしか方法が無かった。あらかじめ、村の歴史に詳しい老人を2～3人集めておいてもらいヒアリングを行った。正確さを期すため、別の老人に集めた情報のチェックをしてもらった。また、西安・韓城地区の歴史家、郷土史家11名にもヒアリングを行った。

8. 寨の機能と形態

寨は、敵の来襲に際して、家とはともかくまず身を守るために、村から「逃げ込む」場として造られる。次いで、敵の攻撃をかわすために「守る」ことが必要となる。また、敵が去るまでの一定期間そこで「生きる」行為が展開される。更に、状況次第で敵と積極的に「戦う」ことも要求される。寨は、このような要求機能に対応して造られた実に計画性に富んだ構築物である。

8.1 「逃げる」への対応

(1) 村と寨との距離

言うまでもなく、敵の来襲を知って素早く逃げ込めるように、寨はできるだけ本村に近い方が望ましい。試みに調査事例を対象に両者の距離関係をみると、単一寨の場合、本村の端から寨の入口までの距離(坂道は1.5倍し

表5-1 寨の設置個数、地形、本村・寨間の距離からみた寨の分類

設置個数 地 形 本村と寨との 距離関係	寨非保有型（城壁村）				単一寨型				複微寨型			共同寨型		
	Ⅰ. 平 地 型	非 平 地 型			Ⅴ. 平 地 型	非 平 地 型			非 平 地 型			非 平 地 型		
		Ⅱ. 半 島 型	Ⅲ. 準孤島型	Ⅳ. 孤 島 型		Ⅵ. 崖 縁 型	Ⅶ. 準崖上型	Ⅷ. 崖 上 型	Ⅵ'. 崖 縁 型	Ⅶ'. 準崖上型	Ⅷ'. 崖 上 型	Ⅵ''. 崖 縁 型	Ⅶ''. 準崖上型	Ⅷ''. 崖 上 型
A 寨非保有型 （城壁村）	仁義村 ※1	相里堡	呉村		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	※1 山西省河津県（韓城県の東隣）の村													
B 村 寨 隣 接	—	—	—	—	孟家荘 ※2	—	西賈村	—	—	—	—	—	—	—
					※2 合陽県（韓城県の南隣）の村									
C 村と寨は 300m未満	—	—	—	—	—	張家堡 東彭村 段家堡 柳 村 大德堡	—	党家村	—	—	—	解家小寨	—	—
D 村と寨は 500m未満	—	—	—	—	—	西彭村	—	南陳村	—	—	—	—	—	—
E 村と寨は 1km未満	—	—	—	—	—	堡安村 杜家堡	—	城古村 登 村 新庄村 楊 村	—	—	—	姚庄村 東 寨 西 寨	—	—
F 村と寨は 1km以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
								</						

注) 今回の調査では、韓城地区に寨非保有型の平地型及び孤島型、単一寨型の平地型の事例は発見されなかった。ヒアリングによると実在することであるので次回の調査課題にしたい。

て換算)が300m未満、早足で3分未満のものが7例で、全15例中の約半数を占めている。更に、500m未満を含めて9例と、距離の短いものが大半を占める。この中には偶然に地形に恵まれ、近くに適地が得られたものもあるが、後述するように、地形的には不利であっても、短時間で逃げ込めることを優先して、あえて近接地に寨を築造したものも見られる。ここに「逃げる」ということが寨に期待される第一義の機能であったことが認められよう。外敵の来襲時、金や財宝以外の物はほとんど携行せず、命からがら逃げたとされる逸話にも、このことが裏付けられる。一方、500mを超え、逃げるのにかなりの負担を強いられるものも6例見られる。守りやすい地形を選択した結果であろう。寨が「逃げる」機能を第一義としながらも、「守る」機能との適度のバランスの上に立って、計画されたものであることを示唆している。複数寨の場合は、複数化の要因が多様であるので、距離との相関が明快ではないが、地形や用地規模を重視したものは遠く、そうでないものは近いという傾向がある。共同寨では、別々の村から使用するため、いずれも距離は長い。1.3kmという最長の事例は共同寨のものである(表8-1)。

(2) 寨の規模

寨の規模は、大半が5,000～15,000㎡の間に分布している。特に15,000㎡台が多い。120～140m 4 方程度の広さである。寨の規模は、本村の規模に応じて計画された

表8-1 村と寨との距離

設置類型	単一寨	複数寨	共同寨	合計
距離 (m)	15村 15寨	3村 6寨	12村 4寨	30村 25寨
0～	3	2	1	6
100～	1	1		2
200～	3			3
300～	1		1	2
400～	1		3	4
500～	1		1	2
600～	1		1	2
700～	2		3	5
800～				
900～	2	2		4
1,000～				
1,100～				
1,200～		1		1
1,300～			2	2
合計	15	6	12	33

注) 寨を持たない呉村、相里堡は集計対象から除いた

表8-3 谷の数、村からみた寨の位置、村と寨の距離の相関

谷の数	村からみた寨の位置			村と寨の距離				合計
	崖縁型	準崖上	崖上型	300m未満	500m未満	1km未満	1km以上	
1方向谷	2	1		3				3
2方向谷	2	2		4				4
3方向谷	8		7	3	3	8	1	15
4方向谷	2		1	1		1	1	3
合計	14	3	8	11	3	9	2	25

あろうが、一方で自然の地形に左右されたためか、現実には、必ずしも本村と寨の規模の比例関係は明確ではない。更に調査事例を増やして統計を取れば、違った結果が得られるかもしれない(表8-2)。

8.2 「守る」への対応

寨は、人はもとより財産の隠し場所としても重要な役割を果たしていた。その守りは堅固で容易に崩せなかった。寨が攻め込まれたことは数少なく、それも防御の弱点を突かれたのではなく、計略に引っかけられ^{じゆうりん}蹂躪された例を聞くに過ぎない。

(1) 谷の活用

寨は、その防御性を高めるために、周囲が谷で囲まれた地形を選んで造られる。全25例のうち、半島状すなわち3方向が谷となっているものが15例と最も多い。更に、残りの1方向もかなりえぐれていて、ほぼ4方向が谷となっているもの3例を含めて、7割程度の寨がこのように険しい場所に造られている。谷が1方向又は2方向といった、防御性能に欠ける事例は7例と少ないが、そのすべては、本村から300m未満の近接地に設けられている。守る機能よりむしろ逃げる機能を優先するため地形的には多少の妥協を行い、防御性能の低下は高い城壁や堀で補おうとしたものであろう(表8-3)。

(2) 城壁

城壁の高さは、大砲の砲弾を防ぐために8～10mが標準とされるが、3方向谷、4方向谷の場合は、外からの攻め口になりやすい台地側を高くし、奥になる程高さを減じ、場合によっては最奥に城壁を築かず、全体としてチリトリのような形状を成す。防御性能と経済性のバランスが見事なまでに視覚化されている(図8-1)。他方、1方向谷や2方向谷の場合には、全周が一定の高さに、しかも高く築かれ、あたかもコップのような形をしている。谷の無い方面には必ず堀が掘られている(図8-2)。

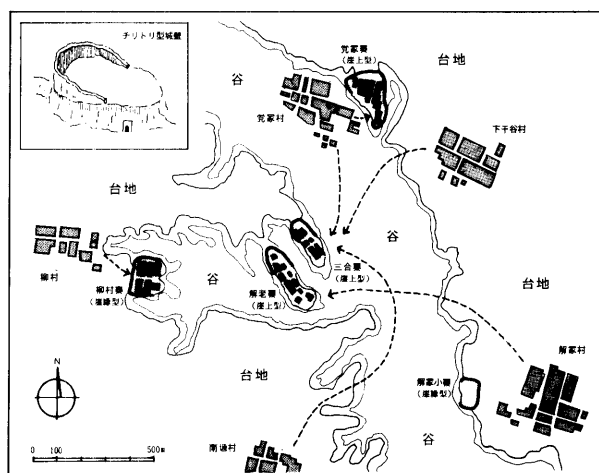


図8-1 地形と寨の位置及び形状(解老寨周辺地域)

城壁は土で築かれ、その土は寨の周囲の地面を掘って調達される。掘った後が堀になって、実質的に城壁の高さを増し、一挙両得であった。面積17,400㎡の一般的な寨の実測によると、掘った後の堀の容積は11,500㎡、城壁の土の量は9,500㎡であった。残りの土は恐らく家の壁に使用されたと思われる。いずれにせよ、機械工具に乏しかった時代なので、大変な労力を要し、先述のように完成まで2～3年かかっている。なお、山岳地域では足下を固めるために、石積みが使用される場合もあった(図8-3)。

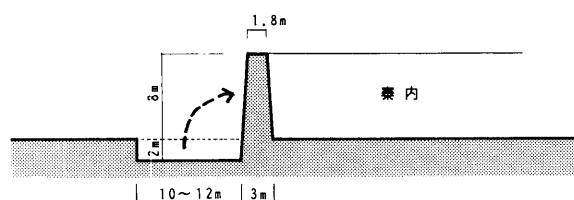


図8-3 城壁の断面

(3) 寨の入口(門、トンネル)

絶壁の上に同じように築かれる寨であっても、本村が台地上にあり、寨がその台地の果てる所(このような場所を塬という)に配置される場合(以下、崖縁型)と、本村が台地の下にあり、その上の寨と一対を成す場合(以下、崖上型)とに大別される(表5-1、図8-2)。

このような本村と寨との地形的な組み合わせの違いは、本村から寨へのアクセス形式の違いをもたらす。前者の場合は城壁に穿たれた門という形式を取り、後者の場合は台地の上下をつなぐ傾斜トンネルとなる。

門は半島状の寨においては、台地側の1か所に設けられるのが普通であり、平地が多い所では2か所の場合もある。稀に東西南北の4か所の事例も見られた。

一方、トンネルの場合、断面は円筒ヴォールト式で、内径は高さ3m程度、幅2m程度(馬車の通行が可)が標準であり、長さは高低差にもよるが20～30mが一般的である。内壁は煉瓦で仕上げられている。トンネルの入

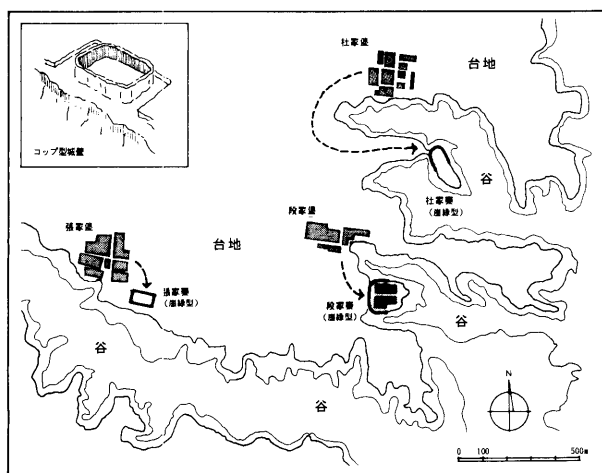


図8-2 地形と寨の位置及び形状(張家堡周辺地域)

口近くには、一部に窪みを設け番人を置いている。また、敵の来襲時に土砂を上から落とし、トンネルの一部を閉鎖する仕掛けも講じられている。

(4) 街路・周回道路

寨内の街路網は、魚の骨のように中央部を縦方向に幅の広い道路が走り、枝道がこの主街路に直交して配置されるものが一般的であるが、梯子形のものも見られる。迷路状を成すことが多い本村と比べて、極めて単純明快に造られている。寨内に侵入した外敵の攪乱を目的として迷路化するよりも、外敵の侵入を未然に防ぐための防備と監視のしやすさ、すなわち守備陣の移動性を重視して計画された結果であると推察される。城壁に沿って寨の内周を取り巻く周回道路も同様の意図のもとに造られたものに違いない(図8-4)。

(5) 財宝の隠し場所

寨は人の逃げ込み場所としてだけではなく、財宝の隠し場所としての役割も果たしていた。典型的なものは解老寨のもので、接近するのが容易でない絶壁を利用して煉瓦造りの堅固な隠し場所が設けられている。

(6) 関帝廟

寨には必ずと言ってよい程関帝廟が祀られている。関帝とは、三国志で名高い劉備と義兄弟を結んだ義勇の誉れ高い、山西省出身の武人関羽のことであり、ゆかりの深いこの辺り一帯の守り神として崇められている。寨では、物理的な守りを固める一方、精神的な守りをこの関帝廟に託したのであろう。本村にはほかにも多様な廟があるのに、寨にはほとんどこれだけである。防御施設としての寨の性格がここにも表れている。置かれる場所は、城門やトンネルの上部あるいは近接地である。また、それぞれの区画街路の端部において、城壁沿いに関帝照壁が設けられる場合も見られた(図8-4)。

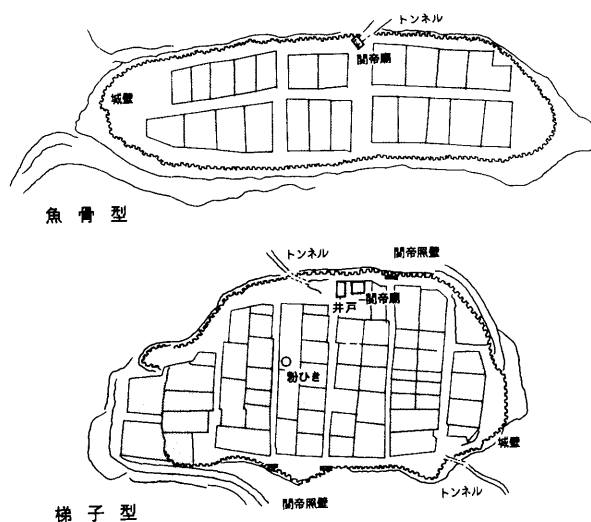


図8-4 寨の街路網及び諸施設

8.3 「戦う」への対応

外敵からただ守るだけでなく、時には戦うことも必要であった。明・清時代では武器は鉄砲だけでなく大砲も幾つかの寨では持っていた。これを撃つ砲眼を確保するため、城壁の所々が鋸^{のこぎり}状になっている寨もあった。そのほかにも、城壁上には「雉堞」(姫垣)^{ちちよう}など色々な防御・迎撃手段が巧妙に講じられていた。

戦うための組織づくりも行われていた。清・咸豊3年(1853年)太平天国軍の侵入に対して防備するため民団が組織され、民国3年(1914年)には匪族に対する防備として、県政府は各村に民団を組織することを命じている。しかし、寨で戦ったことは記録には無い。古老から戦った事例を聞くことができたのも3例だけである。寨があまりにも堅固なため、本村を荒らすだけで通り過ぎたケースが多かったものと考えられる。

また、かつては寨も韓城を中心とする地域防衛の拠点として重要な役割を果たしていた。明末(1635年頃)の李自成が率いる農民蜂起軍の侵入に対して、韓城を取り巻く主要な寨に兵力が置かれていたとの記録が残されている(図8-5)。

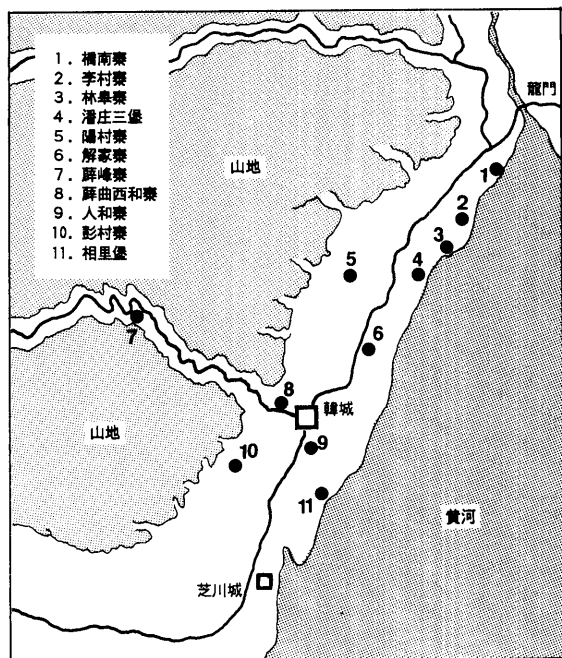


図8-5 明末の農民蜂起軍に対する守備軍がいた寨

8.4 「生きる」への対応

(1) 住宅

外敵をやり過ごすまでの一定期間、村民は寨の中での生活を余儀無くされ、そのためのシェルターが必要とされた。調査した25例のうち、住宅があり今も人が居住している寨は18例ある。すべて四合院形式である。しかし、寨の築造時より家があったか否かは不明である。当初は窑洞で済ませていたものも少なくないと思われる。現在

もその痕跡^{こんせき}が残っている寨が幾つか見られた。また、全面積の1/3程度の部分に金持ち(地主層)の住宅が建てられ、その他は空地として残されていた寨もある。空地は地主以外の村民の避難場所であったと推察される。貧富の差を反映したものであろう。

寨内の住宅は、本村のものに比べて一回り小振りである。本村と寨の住宅の持ち主同士の対応関係が、ある程度はっきりしている党家村の場合、本村では家の間口10~12mに対して、寨では6~9mと大きな開きがある。寨の広さには限りがあるし、寨の家はもともと一過性の住宅であったことから、このような差が生じたのであろう。

(2) 井戸・ため池

生存上、飲料水の確保は必須である。いずれの寨も井戸に依存していたが、孤立した地形のため水脈は谷底にしかない場合が多く、その水位に達する深さの井戸が必要であった。80~100m程掘らないと水が出ないものもあった。位置は寨の端部の絶壁近くが多い。少しでも水脈に近い場所が選定されたのであろう。また、ため池も造られており、洗濯や家畜用に利用されていた。

(3) 粉挽き臼

当然のことながら食料の調達も欠かせない。寨内にとどまる期間が長くなる程非常食では間に合わなくなったであろう。臼で挽いてしまった粉には虫がつきやすく保存が困難なので、あらかじめ挽く前の穀物を保管しておく、必要に応じて挽く必要があった。寨にはそのための共同の挽き臼があり、小屋がかけられていた。井戸の近くに設けられていたものが多い。

(4) 娯楽的要素

一過性の居住地であることから娯楽的要素は皆無に近かった。稀に舞台があったとされる寨もみられるが、昔からあったものか、後代になって寨に村民が常住するようになってから造られたものか定かではない。

9. 四合院住宅の平面構成

9.1 平面構成考察の目的

調査対象の韓城地区の住宅は、中国全土に広く分布する四合院形式であるが、その典型的な平面構成とされる「一明両暗」では構成されていない。つまり「一明両暗」における基本構成である「堂屋+2臥室」といった段階構成は取られず、上房は1室型であり、廂房は院子からの直入り型の臥室によって構成されている。また、廂房の間口数もこれまで典型とされている奇数ではなく、偶数であるといった特異点が予備調査によって確認された。従って、調査対象地区における四合院住宅の地域的特徴を明らかにすることを目的とする(写真9-1)。



写真 9-1 四合院住宅（党家村）

今回の1次調査での対象は、各集落において古老などへのヒアリング、踏査により、比較的古くから残されている住宅について、プラン採取及び住まい方採取を行った15例である。このうち3例は、比較・参照する目的で採取した韓城市街地と、陝西省に隣接する山西省河津県の住宅であり、これらは補完的に扱い、12例を今回の主たる考察対象とする。

9.2 調査対象住宅の概要

上房・門房の間口数（柱間数）は、基本的に3間又は5間の奇数間口で、構造寸法もほぼ左右対称である。また、院子に面する扉は厳密に中心に配置されている。

廂房においては、3間と5間の奇数間口とともに、4間ないし6間といった先天八卦で「陰」とされる偶数間口が存在する（表9-1）。

先に調査・報告された「党家村」（青木正夫ほか：世界図書出版公司、1992年）においても、全集落の半数以上が偶数間口であったことから、四合院のひとつの特徴である廂房の奇数間口は、やはりこの地域には必ずしも当てはまらない。

表 9-1 調査対象住宅概要

No	集落名	世帯主	間口数			世帯数	家族人数	方位	大門位置・方位	間口寸法 (m)			奥行寸法 (m)			列柱	親族	調査日	その他		
			上房	廂房	門房					廂房	院子	門房	院子	上房	廂房					回廊	隣居
01	相里堡	張永遜	3	4	5	5	1	座北朝南	右位門SE	12.0	3.6	4.8	23.5	3.6	16.0	3.9	11.8	無	有	931028	二層院変則型
02	堡安村	陳惟慎	5	3	5	2	6+1	座西朝東	左位門SE	13.2	3.0	7.2	17.7	3.3	9.6	4.8	6.2	有	無	931028	
03	張家堡	張汝勤 (3)	4	5	3	1	0	座南朝北	右位門NW	12.4	3.6	5.2	23.5	4.2	14.8	4.5	9.8	無	有	931029	二層院変則型
04	段家堡	段文超	3	4	5	2	5+1	座北朝南	右位門SE	12.2	3.7	4.8	22.0	3.8	14.2	4.0	10.3	無	無	931029	
05	段家堡	段文抗 (-)	6	5	1	3	+2	座北朝南	右位門SE	11.0	3.0	5.0	21.2	3.2	(1.0)	12.0	無	無	931029	もと二層院	
06	杜家堡	杜田福	3	3	5	2	5	座北朝南	右位門SE	13.2	3.4	6.4	22.8	3.5	15.3	4.0	10.3	無	無	931029	
07	柳寨子	廉喜昌	3	5	5	3	8+1	座南朝北	右位門NW	12.0	3.7	4.6	27.3	5.0	18.3	4.0	14.6	無	無	931030	
08	大德堡	劉景輝	3	3	5	2	5	座西朝東	右位門NE	12.8	3.2	6.4	23.2	3.8	13.6	5.8	9.0	有	無	931030	
09	姚庄西寨	楊慶桐	3	3	5	4	9	座東朝西	左位門NW	11.2	3.0	5.2	20.0	3.6	11.2	5.2	7.0	無	無	931031	二層院・大門位置変更
10	牛家角	牛民綱	-	5	5	2	8	座北朝南	右位門SE	11.2	3.0	5.2	17.6	3.8	13.8	-	10.8	有	無	931031	
11	馬村	牛敬忠 (-)	5	5	4	6	+3	座北朝南	右位門SE	11.0	3.2	4.6	26.4	3.6	(2.8)	12.6	無	無	931031		
12	柳枝村	孫永敏	3	3	5	2	5	座北朝南	右位門SE	13.8	3.2	7.4	24.0	4.0	15.0	5.0	9.0	有	有	931031	
13	韓城市街	張緒閣	5	3	5	3	9	座北朝南	右位門SE	14.2	3.0	4.5	16.7	3.0	9.8	3.9	6.2	無	無	931102	
14	西梁	阮富厚	3	3	-	1	5	座北朝南	中位門S	11.0	3.2	4.6	18.3	-	12.2	3.9	8.7	無	無	931101	三合院 ※山西省
15	北原村	王建強	3	3	-	2	4	座北朝南	右位門SE	10.6	3.2	4.2	16.8	-	8.8	3.7	5.2	無	無	931101	※山西省

註 1) 間口数 () は、撤去されていた事例

2) 間口数 - は、当該の棟 (房) が存在しない事例

3) 家族人数 + 数字 は、勤務・就学などによる別居者数

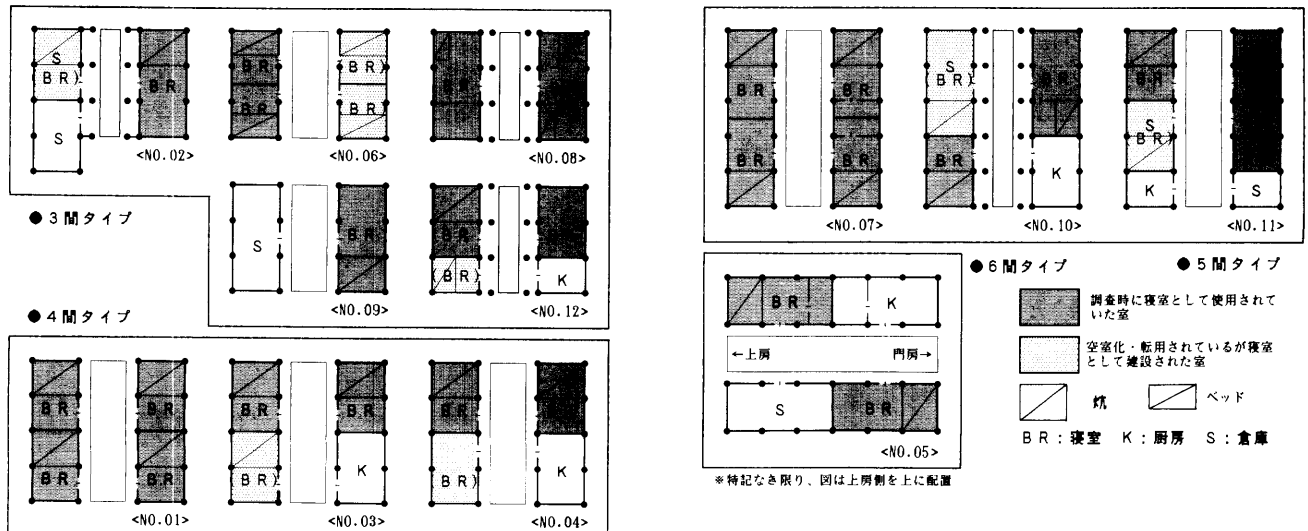


図 9-1 廂房平面構成モデル図

四合院の方位については、上房が北に位置する「座北朝南」が多いが、街区割りの関係から例外も見られる。一方、大門の位置はほとんどが右位門である。左位門2例のうち1例<No.02>は、敷地条件から側方入りとなったものであり、もう1例<No.09>は、元来の右位門が、後に左位門に改修されたものである。その要因として、この事例は「座東朝西」の配置であり、右位門にした場合、八卦による「凶」の方位である南西に大門が位置してしまった結果であると推察される。

9.3 平面構成と住まい方の特徴

(1) 上 房

上房は、前述の通り間仕切りのない1室型が多く9例中7例で、他の2例も軽微な間仕切りで区画されている程度である。元来、正庁としての祭礼空間として位置づけられていたことが考えられ、現在でも正面中央に祖先を祀る「祭祖牌位」が設けられている場合もあるが、日常的には倉庫化しており、格式性は低下している。また、既に撤去されているものもあり、機能性からもその位置づけは相対的に低い。しかし、上房を寝室化している事例は家族人数の多い世帯においても見られない。

(2) 廂 房

廂房においても、「一明両暗」は見いだすことはできない。間口3～6間の廂房の平面構成を模式化すると図9-1のようになる。

3間タイプの場合、3間1棟を1室化し、寝室として使用する例が多いが、2間と1間に区画しているものや、中には3間を中央で区画し、左右で4寝室を確保しているもの<No.06>も見られる。この事例は、柱間寸法が約3.5mあり、間口数の割に面積的な余裕があるために可能となっているが、柱割りを無視して主たる間仕切壁を設け、寝室を多く確保する志向が窺える(図9-2)。

3例見られた4間タイプの場合、各室はすべて2間で区画されており、主に寝室が取られ、あるいは厨房が設けられている。間口2間が、室構成の基本単位とみることができる(図9-3)。

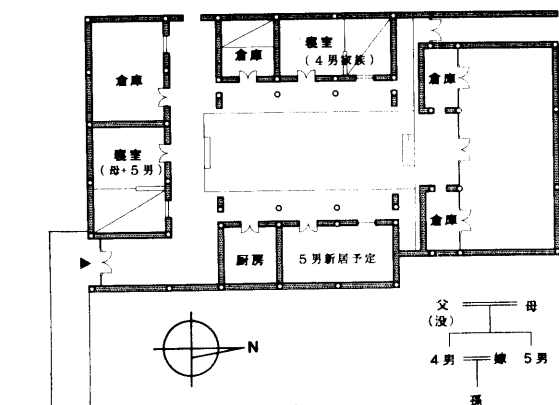


図9-2 廂房3間タイプ平面図<No.12>

5間タイプでは、それぞれ異なったヴァリエーションを示している。5間を、3間+2間に仕切っている事例<No.10>、2間+2間+1間にしている例<No.11>、更に、3間タイプで見られたものと同様に中央で2間半ずつに区画しているもの<No.07>がある。

唯一採取した6間タイプは、各室を3間で間仕切り、扉をそれぞれの中央に配置している。厨房も3間を2室化した余裕のあるものである。但し、この事例は柱間隔2mの小6間であることから、1室の規模は間口2間の室とは相違が無い。

廂房の特徴を、更に主要室である寝室に絞ってみると、廂房の間口数にかかわらず、1寝室2間が最も多く見られる。この地区の平面構成における基本単位として、間口2間が支配的であることが考えられる。

厨房は、廂房に設けられるものが6例<No.03/04/05/10/11/12>と多く、うち4例は間口2間の広いものである。門房に設けられた2例<No.02/07>を合わせると8例が、残余空間ではなく廂房・門房といった棟の1室として取られている。

(3) 門 房

1例を除き、門房には寝室が設けられている。また、家族の減少などによる空室化や、季節による寝室移動の例を除き、家族の年長者あるいは世帯主が、門房の寝室を使用する傾向がみられる<No.01/02/03/08/09/10/12>。

(4) 大家族及び近親家族との隣居の特徴

① 二層院

四合院の拡張した形式である二層院が1例<No.09>、かつての二層院を上房(過庁)を含め撤去したものが1例<No.05>見られた。現存している方は、3世代家族、親子2世代家族がそれぞれが2家族の計4家族が居住しているが、前院の老世帯(いずれも母のみ)の2世帯が、

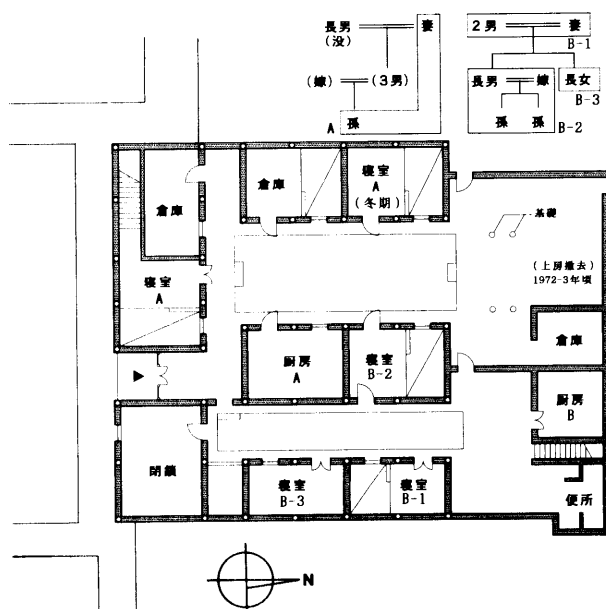


図9-3 廂房4間タイプ・変則二層院平面図<No.03>

後院に若世帯及び子供の2世帯が居住し、家族別ではなく、世代別に分かれて居住しているという特徴を持っている。

また、後院の廂房・上房に当たる棟には、前院に見られる正面性や対称性は無く、副次的色彩が強い。

② 変則型二層院

大家族対応として、廂房を2重に配置した事例が2例<No.01/03>見いだせる。

大門（右位門）側廂房の裏に細長い通路状の院子を挟んで廂房に相当する棟を配置し、また、入口側は門房が延長される形で拡張されており、結果として、従来の四合院にL字形の棟が付加された形式である。本来の二層院が、入口から後方に展開するのに対し、側方に展開する変則型とみることができる。

<No.01>の場合、3家族5世帯11人が居住しているが、家族ごとに計3室の厨房を設けており、2寝室1厨房が1家族の構成単位となっている。寝室はすべて四合院部分にあるが、厨房2室と倉庫・便所が付加部分に設けられている。<No.03>は、四合院部分に老母(74歳)と他世帯の孫2人が住み、付加部分に別家族(2世帯7人)が住むという明確な領域区分がなされている(図9-3)。

③ 近親家族隣居の事例

複数の近親家族が隣居して住む事例が、前項に挙げた変則型二層院の2例を含め3例ある<No.01/03/12>。本家である四合院（以下、「主院」という）から分家する際、主院を中心に「寝室+院子+厨房」の構成単位が、周囲に隣接されるパターンを採っている(図9-4)。

<No.03>の場合、6家族27人が隣居しているが、分家

に当たる4軒の住宅は、各々が大門を含む門房と一文字型の廂房から構成され、外見上は独立した住宅の形式を保っているが、内部動線は相互に連絡通路があり、日常生活においても緊密なつながりを示している。また、分家の住宅形式は、四合院ではなく、格式的形式性は希薄である(図9-3)(図9-4)。

他の2例においては、門房も見られず、住居形式は更に崩れて、所要空間が点在しただけの格好である。また、<No.12>では、長男・2男・3男が隣居し、4男・5男世帯が本家に居住する典型的末子相続の居住形態を取っている。

隣地と壁1枚で接する集居形式の集落においては、分家の際には、集落内の他敷地に住宅を求めるのが一般的であるが、このような増殖的拡張が行われるようである。

9.4 対象地区における四合院住宅の特徴

以上から、韓城地区周辺の集落における住宅の特徴を列記する。

- (1) 「一明両暗」は見いだせない。
- (2) 上房は1室型が基本であり、寝室化しにくい。
- (3) 廂房間口は、「偶数」の事例が存在する。
- (4) 廂房寝室の構成は間口2間が支配的である。
- (5) 廂房寝室は直入り・1室型である。
- (6) 門房を年長者・世帯主が使用する傾向が見られる。
- (7) 厨房は各棟の残余空間ではなく、廂房・門房に設けられる例が多い。
- (8) 大家族への対応の変則型二層院の形式が存在する。
- (9) 本家を中心に近親家族隣居の住宅構成が見られる。

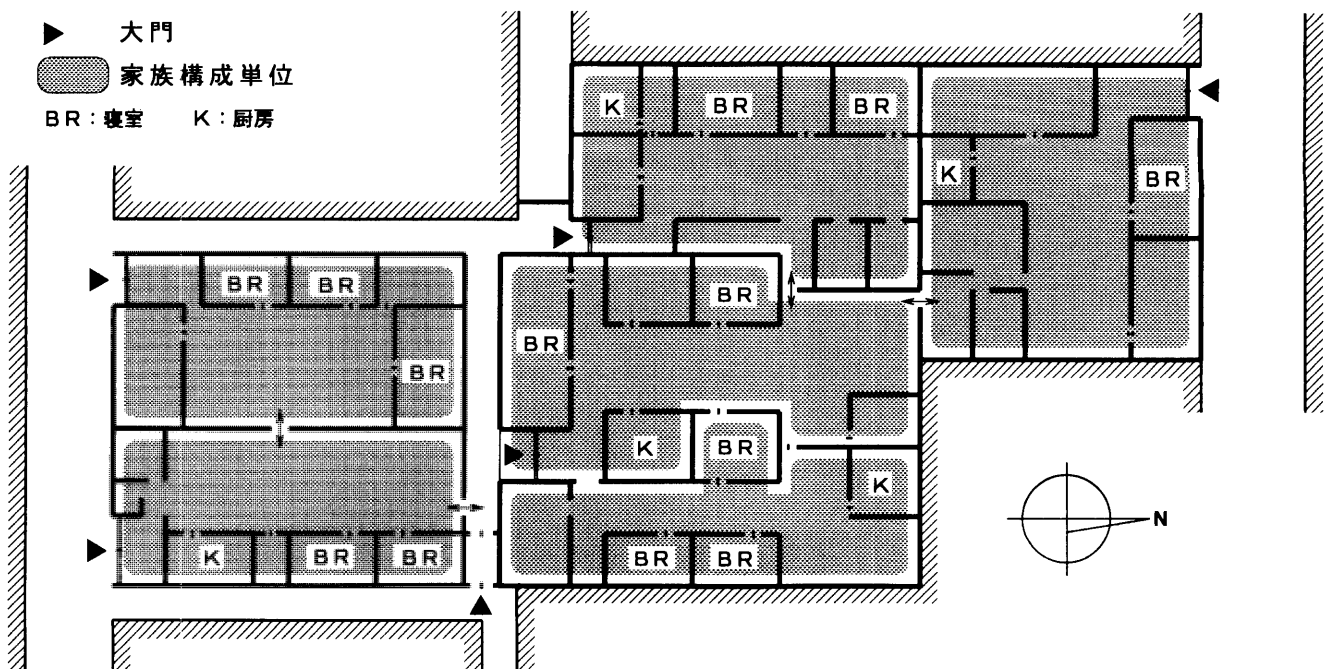


図9-4 近親家族隣居モデル図<No.03>

10. 結びにかえて

調査前の情報では、堡と寨とはほぼ同時代のものとのことであったので、調査当初は堡と寨と村との関係を丹念に調査を行ったが、堡については不明な点が多く、その関係をとらえることは断念せざるを得なかった。従って、今回は寨と村との関係及び寨の構造に焦点を絞り、限られた期間であったが、70か所のうち25か所の寨の調査を行った。調査は、主として北部地域のもので、今でも居住者がいて名の通った寨が中心であった。従って、ここに論じた考察はその範囲での仮説の域を出ないものである。更に再度の調査を重ね、考察を深める必要がある。次年度は、今回の調査では訪れることができなかった、①非保有型(城壁村)、孤島型、平地型などの寨、②明時代より前の寨、③南部地域の寨の探索と考察、④清時代に寨の築造ブームの背景になった回族蜂起軍の韓城への侵入ルート の 解 明、⑤城壁上の諸防備手段についての詳細な解明、及び⑥村の生成及び分布について詳細な考察を行いたいと考えている。

<注>

- 1) 張家堡・杜家堡の近くに、後漢の時代、夏陽府の政庁があった。
- 2) 杜家堡の碑文によれば、村を取り囲んだ壁の底幅が4尺(1.2 m)とあるから、それ程大きいものでないが、嘉慶12年(1807年)の秋に工事を起こし、15年(1810年)の冬に落成しており、工事費は合計で700文余りとなっている。
張家堡での70歳の男性からのヒアリングによると、他から技術者2人を雇い、村人200人が毎日働いて2年半を要している。

<研究組織>

主査	青木 正夫	九州産業大学工学部建築学科教授
委員	上和田 茂	九州産業大学工学部建築学科教授
	船越 正啓	九州産業大学工学部建築学科助手
	鈴木 義弘	大分大学工学部建設工学科助手
	竹下 輝和	九州大学工学部建築学科教授
	張 光	西安冶金建築学院外事弁公室主任
	周 若祁	西安冶金建築学院建築系教授
	邵 曉光	西安冶金建築学院建築系副教授
	劉 燕輝	中国建築技術發展研究中心 居住工程環境研究所副所長
	劉 東衛	中国建築技術發展研究中心 村鎮計画設計研究所設計室主任
	陳 維敬	韓城市人民政府建設局